

フョイエルバッハの会通信 第98号

【国際学会ニュース】

国際フョイエルバッハ学会共催 2016年秋の研究集会

国際フョイエルバッハ学会と若手研究者を集めた die Arbeitsstelle Internationale Feuerbachforschung との共催による研究集会。

2016年11月11日～13日。

場所不明（おそらくミュンスター大学かその周辺の施設）。

テーマ：将来の哲学と教育学——フョイエルバッハ兄弟ルートヴィヒとフリードリヒの対話 (Philosophie und Pädagogik der Zukunft. Die Brüder Ludwig und Friedrich Feuerbach im Dialog.)

詳細は現時点では不明ですが、次号でお知らせできると思われます。なお、「最初のオリエンテーリング」としてライテマイヤーさんが *Jahrbuch des Forums zur Vormärzforchung* にて公開した論文があります。ご希望の方には電子メールの添付ファイルでお送りします。

以下、その概略を主観を交えて紹介します。

フリードリヒ・フョイエルバッハは、ルートヴィヒが『将来の哲学の根本命題』を公刊した同じ年に『将来の宗教』を公刊している。それら「将来著作 (Zukunfts-Schriften)」はともにツューリヒの *Literarisches Comptoir* から公刊されたが、この出版社はユリウス・フレベールの影響下にあり、ヘルヴェーク、ルーゲ、マルクスらの著作も公刊しており、三月前期の民主主義運動の中で活動する、スイス反動派に対抗する出版機関だった。

『将来の宗教』は、市民的公共性の解放を目指す啓蒙哲学であるが、根本的には、当時まだ教会の支配下にあった国民教育 (Volksbildung) の改革を目指すものであった。それはまた、ルートヴィヒの宗教哲学を、社会的、政治的ならびに教育学的な改革過程と連関させて捉えること、あるいは、ルートヴィヒが強調する人間の幸福衝動を「社会的に経験できる幸福への人間の努力 (das menschliche Streben nach gemeinschaftlich erfahrbarem Glück)」として捉えること、を意図したものと言える。「人間が幸福であるのは、人間が自らの自然に対応する生活形式を見出した場合である。」しかし、現状ではキリスト教によって引き起こされる分断と自己疎外によりそうした生活が困難であるがゆえに、将来の宗教の仮題は、こうした自己疎外を再度疎外することであり、そのために「世俗的な民衆教育」が必要である。言い換えれば、「政治的な意志形成に民衆がリアルに政治関与すること」が求められ、そのための実践的な授業が組織化されなければならない。そこで求められるのは、身体と精神と心胸とを調和させ同程度に形成することである。フリードリヒ・フョイエルバッハの「将来の宗教」は、挫折した三月革命の情勢から見れば、制度的・実践的効果なしの信条告白に留まると言わざるを得ない。だが、そうだとしても、こうした教養形成と公的授業、つまり「教育学の人間化」こそが、国家と社会との人間化や民主化の唯一の道である。

フリードリヒの著作

Theanthropos. Eine Reihe von Aphorismen. Was ist Wahrheit?, Zürich: Druck und Verlag von Drell, Füßli u. Comp. 1838.

Die Religion der Zukunft, 1. Heft. Auch mit dem Umschlagstitel: Mit Reisepaß eines Christen, Zürich und Winterthur: Verlag des literarischen Comptoirs, Druck v. J. Fr. Heß, 1843.

Die Religion der Zukunft, 2. Heft. Auch mit dem Umschlagstitel: Die Bestimmung des Menschen, Nürnberg: Verlag von Theodor Cramer, 1845.

Die Religion der Zukunft. 3. Heft. Auch mit dem Umschlagstitel: Mensch oder Christ? Sein oder Nichtsein?, Nürnberg: Verlag von Theodor Cramer, 1845.

Die Kirche der Zukunft. Eine Reihe von Aphorismen, Bern: Druck und Verlag von Jenni, Sohn, 1847.

Gedanken und Thatsachen. Ein Beitrag zur Verständigung über die wichtigsten Bedingungen des Menschenwohls, Hamburg: Verlag von Otto Meissner, 1862.

なお、フリードリヒ・フォイエルバッハに関する日本語文献として、次のものがあります。石塚正英編『社会思想史の窓』第9号(1985.2)、第10号(1985.3)、第11号(1985.4)掲載「W・マールによる民衆の読者のための、フリードリヒ・フォイエルバッハ『将来の宗教』」滝口清栄訳・解説。

Friedrich Feuerbach, *Gedanken und Thatsachen. Ein Beitrag zur Verständigung über die wichtigsten Bedingungen des Menschenwohls, Hamburg 1862.*

Einleitung.

Daß nicht Alles, was der Mensch wünscht, darum auch wahr und wirklich ist, das versteht sich von selbst; daß ein geliebter Gegenstand nicht nothwendig die Eigenschaften wirklich besitzt, die vom liebenden Gemüthe ihm beigelegt werden, das müssen wir, leider! im Leben oft genug erfahren, daß auch die Liebe, obwohl sie im Besitze des geliebten Gegenstandes Heil und Seligkeit sucht, das gehört ebenfalls zu den gewöhnlichen Vorkommnissen unseres irdischen Lebens.

Das hiemit Gesagte mag genügen, den Leser dieser Zeilen auf das vorzubereiten, was in den nachfolgenden Blättern von der in der Christenheit ausgebildeten Gottesvorstellung, von ihrer Haltbarkeit im Angesichte gewisser Thatsachen, und von ihrer Bedeutung für die menschlichen Geschichte ausgesagt wird.

Nicht aus Hoffnungen, Wünsche, dunkle Ahnungen und Träume, sondern möglichst nur auf unzweifelhafte Erkenntnisse glaubte ich bei der Feststellung der wichtigsten menschlichen Heilsbedingungen fußen zu dürfen.

Die Endabsicht gegenwärtiger Schrift ist übrigens nicht, eine Art von Gefängniß für alles menschliche Fühlen, Denken und Dichten aufzubauen, nein! ich wollte nur einen festen Boden für dasselbe herstellen und gewinnen, einen heimathlichen Boden, den man wohl zu Zeiten verlassen mag, um 1/2 beliebige Streifzüge in die Nähe und Ferne zu machen; dem aber Keiner wohl, ohne Gefahr, ganz sich entfremden dürfte.

Vernünftige Selbstbeschränkung ist stets zugleich eine Art Selbstbefreiung, ist eben der beste Weg zur Freiheit, wie sie nämlich für Menschen möglich und wünschenswerth ist. Zügellosigkeit ist gerade der kürzeste Weg zur Unfreiheit, zur inneren und äußeren Knechtschaft.

Man hört häufig Denen, welche sich und Andere über die wahren Bedingungen des irdischen Menschenwohles aufzuklären suchen, die Einwendung machen: "Ei was! die Erde ist ein Jammerthal, sie ist nicht gemacht, darauf glücklich zu sein. Seht ihr nicht den düstern Trauerflor, der alles Irdische umhüllt? Es ist eine Thorheit, das irdische Glück und Wohlsein als Ziel der Menschheit aufzustellen."

Darauf läßt sich aber erwidern: Eben weil die Menschheit selbst auf der höchsten Stufe der Ausbildung, die nur für sie denkbar ist, immerhin genug Uebeln allerzeit ausgesetzt sein wird; eben weil durch die Leidenschaften, namentlich durch den Ehrgeiz, die Herrsch- und Habsucht Einzelner von Zeit und Zeit der Frieden und die Ordnung der menschlichen Zustände stets hier oder da gestört, oder doch bedroht sein wird, eben weil überdieß noch Krankheiten, Seuchen, Theuerungen, Verherrungen, durch elementarische Ereignisse, wie Erdbeben u.. dergl. herbeigeführt, des Elends und Jammers genug allezeit über die Menschheit bringen werden, ist es ein desto größeres Bedürfniß für sie, die Erleichterung, Erheiterung, Verbesserung und Verschönerung des irdischen Lebens sich zur höchsten Aufgabe zu machen.

In einer Welt, wo nichts zu wünschen übrig wäre, gäb'es überhaupt gar kein Bedürfniß für ihre

Bewohner, also auch 2/3 keines, sich ein gemeinschaftliches Ziel zu stecken, und ein Beitrag zur Verständigung darüber wäre in einer solchen Welt freilich ein sehr überflüchtiges Ding, so überflüssig, als eine brennende Kerze in einem sonnenhellen Raume.

【書誌情報】

服部健二『レーヴィットから京都学派とその「左派」の人間学へ 交渉的人間観の系譜』
こぶし書房、2016年 ISBN: 9784875593133、本体 3,800円＋税

目次

はじめに

第一章 交渉的存在としての人間観の系譜——レーヴィットから田邊、三木、戸坂、和辻へ

第二章 日本文化論の陥穽——高山岩男における〈生む・作る・成る〉の論理をめぐる

第三章 三木清の人間学について

第四章 三木清の歴史的生——「帝国の形而上学」か「個性者の構想力」か

第五章 梯明秀の自然史の思想——「我が兄、我が師」三木清への批判

第六章 舩山信一の人間学的唯物論

さいごに、あとがきもかねて

「前著『四人のカールとフォイエルバッハ』を通して、筆者はフォイエルバッハの人間学を種々のフォイエルバッハ解釈と批判の歴史を通して描こうとした。それに際して筆者は、一つ一つの資料分析を積み上げて全体としてフォイエルバッハ像を描くという堅実な手法を採らないで、筆者自身の現在の関心から拾い上げた観念の変遷をたどるという手法をとった。それは従来のフォイエルバッハ解釈が見落としていたフォイエルバッハの主張に焦点をあてるものであった。カール・バルトが見落としたフォイエルバッハの死や有限者の思想、カール・マルクスが誤解したフォイエルバッハの実践概念、つまり対象の美的直観としての理論的直観と結びついた実践的活動としての文化的な目的活動、宗教的表象を抱かざるをえない窮迫した存在としての人間観、カール・レーヴィットが看過した自然史における愛の存在論的認識論的役割など。筆者は、それらを摘出するために、歴史的新版を受け過去の刑場に錯乱し瓦礫となった多くの資料の些細な分析に終始したかもしれに。はたしてフォイエルバッハの人間学の現代的意義を浮き彫りにすることができたかどうか、フォイエルバッハ Feuerbach の名に言寄せしていえば、正直いって、「火 Feuer の川 Bach を往きつ戻りつ花筏」という心境である。前著とあわせすべてを多くの読者からのご批判ご叱正に委ねることにしたい。」（「はじめに」より）

「〔略〕筆者は、人間的現存在が自己自身のありかたを解明する交渉という解釈学的概念に、超越としての自然への通路を求めているのである。この概念と並ぶもう一つの「感受 Empfindung」という概念は、その通路への一つの示唆を与えてくれる概念であった。それは感覚といった誤謬の源泉という低次の認識能力でもなければ、カント的感性のようにただ多様で雑多な感覚要素を受け入れるだけの受容性の能力でもなかった。前著や本著の「はじめに」においても例示したように、私たちが樹々の影を映しだす山間の泉の水面を感受するとき、それは対象としての自然美の感受につきるものではない。それは、さまざまな色合いをもった樹々が歴史としての自然の営みを通してそれぞれの生命度をもって生み出されたことの感受であった。交渉的存在としての人間の生の営みがさまざまな対象との動的相関関係であるという三木の人間学を踏まえて、梯が生命現象を物理学的化学的法則に還元する機械論的還元主義的見方を批判しながら、形態転換する全自然の動的相関的過程を把握する重要性を強調したとき、歴史的な自然の根源的な働きを直観するという点で、無縁と思われるフォイエルバッハ

と梯が意外に共通していたといえる。」(「さいごに、あとがきもかねて」より)

*服部健二さんによる記念講演会の予告

季報『唯物論研究』刊行会・大阪哲学学校共催で、服部健二さんを招いての一般市民向けの、本書公刊記念講演会が企画されているようです。現時点では詳細不明ですが、関心のある方は季報『唯物論研究』のホームページ <http://kiho-yuiken.jimdo.com/> をご覧下さい。

【研究ノート】Wesen の邦訳に関する一考察

川本 隆

『将来の哲学の根本命題』(1843年) §7 第二段落 (FGW9, S.269)

【原文】

Der Theist stellt sich Gott als ein *außer der Vernunft* außer dem Menschen überhaupt *existierendes, persönliches* Wesen vor - er denkt als Subjekt über Gott als *Objekt*. Er denkt Gott als ein dem *Wesen*, d. h. seiner Vorstellung, nach *geistiges, unsinnliches*, aber der *Existenz*, d. h. der *Wahrheit*, nach *sinnliches* Wesen; denn das *wesentliche Merkmal* einer objektiven Existenz außer dem Gedanken oder der Vorstellung ist die *Sinnlichkeit*.

【試訳】

有神論者は、神を理性の外に、人間一般の外に実在する人格的存在者として思い描く *sich vorstellen*。〔つまり〕彼は客体としての神について、主体として考える。彼は、神を本質 *Wesen* すなわち想念 *Vorstellung* のほうから精神的・非感性的存在者と考えるが、しかしこの神を、実在 *Existenz* すなわち真理ほうからは感性的存在者と考える。なぜなら、思想または想念の外にある客観的実在の本質的特徴は感性であるから。

【訳註】

Vorstellung は通常、哲学では「表象」だが、ここではあえて「想念」と訳してみた。表象すること自体は、「前に *vor*・立てる *stellen* = 思い描く」ことであり、精神的（知的）でも感性的（感覚的）でもありうる。カント『純粹理性批判』では、夢のごとき表象と区別して、「感性的直観の対象」としての表象が「現象 *Erscheinung*」であり、「客観的実在性」をもつとされた (vgl. A35f./B52f.)。引用箇所では、*Wesen* と *Existenz* が対になっており、(通常の) 有神論においては、本質的に *Vorstellung* として精神的なものであるはずの神（主観）が、実在的に感性的なもの（客観）とみなされてしまう矛盾を突いている。『根本命題』§7 では「*Vorstellung* 前に立てること = 思い描くこと」という語が、感性的な意味ではなく、もっぱら精神的・主観的な意味に限定されている。

ちなみに、ヘーゲル『精神現象学』「VII 宗教、C 啓示宗教」章では、「神の実在 *das göttliche Wesen*」——榎山訳も金子訳も、啓示宗教における神の *Wesen* は一貫して「実在」——が精神的な本質として理解されず、自分とは異なる存在者として表象されてしまう立場が「啓示宗教」の段階として扱われている。つまり、啓示宗教の神は未熟な表象段階にとどまっており、この神が「表象 *Vorstellung*」ではなく、「本質 *Wesen*」としてとらえられることによって、より精神的に高い段階の「絶対宗教」へ移行すると考えられている。自然に縛られた表象を抜け出して、その本質が精神としてつかまえられるべきなのだ、と (vgl. HGW9, S.400ff.)。フォイエルバッハが *Wesen* と *Vorstellung* を併記し、同格に扱っているこの文脈は、少なくともヘーゲルの用法とは異なる。しかし、これをヘーゲルに対するフォイエルバッハの無理解というのは早計であろう。ヘーゲルの用法を踏まえつつ、ヘーゲル的につかまえられた神的 *Wesen* も実は *Vorstellung* にすぎない、というフォイエルバッハ固有の見解としても読めるからだ。Existenz を *Wahrheit* とみなすあたりは、ヘーゲル的思弁を相対化して批判の一步を進めた、唯物論的境地（ただし、船山信一氏とは異なる意味で）では

なかろうか。フョイエルバッハはカントともヘーゲルとも一味違うレトリックを巧みに使いながら論を進めていると考えられる。

ところが、奇妙なことに、『フョイエルバッハ全集』第二巻の船山訳も岩波文庫の松村・和田訳も「本質からみて *dem Wesen nach*」という3格の *Wesen* を4格にとって訳しているのでは？と疑わせるほどの力技を示している。

有神論者は神を理性の外に、人間一般の外に存在する人格的存在として表象する。つまりかれは主体として客体としての神について考える。かれは神を次のような本質、すなわち、彼の表象にしたがえば精神的で、感性的でない本質であるが、存在、つまり真理から言えば感性的な本質と考える。なぜなら客観的存在の、すなわち、思想または表象の外にある存在の本質的な特徴は、感性であるから。(松村一人・和田楽訳『将来の哲学の根本命題』岩波文庫、1967年、13頁)

有神論者は神を理性の外部に —— 一般に人間の外部に —— 実存する人格的存在者として表象する。すなわち、有神論者は主観として、客観としての神にかんして思惟する。有神論者は神を存在者として思惟する。すなわち、有神論者は神を、有神論者の表象にしたがえば精神的非感性的な存在者として思惟するが、しかし実存すなわち真実態にしたがえば感性的な存在者として思惟する。なぜかといえ客観的実存 —— 思惟または表象の外部にある実存 —— の本質的な目じるしは感性であるからである。(船山信一訳『フョイエルバッハ全集』第二巻、福村出版、1974年、72頁)

ひょっとして読者諸氏は、これらの訳者が *Wesen* の格を取り違えるはずはないとお考えだろうか。しかし、注意して読むと、ドイツ文法や構文をまるで無視するかのような、強引さが認められる。もちろん、長い冠飾句の *ein ... Wesen* の形容部分を後回しにし、「次のような *Wesen*」と先に訳しておいて、「すなわち……という *Wesen*」と付け足す常套手段をとったと考えることは可能である。そのように解釈すると、*Wesen* の3格を4格にすりかえる強引さはとりあえず解消されよう。しかし、今度は新たに、*dem Wesen, d. h.* という語句を丸ごと無視するという別の強引さが、問題として浮上することになる。*der Existenz, d. h.* と美しい対句になっているにもかかわらず、である。この場合、「すなわち」という訳語は、原文の *d. h.* に対応しない。それでいて、あたかも訳されているかのような錯覚を読者に与える。うっかり間違いでないとすると、確信犯的なゴマカシと解さざるをえないのだ。

それにしても、この奇妙な訳は何に由来するのだろうか。解釈はいろいろあると思うが、二つの可能性をあげておく。ひとつは、ヘーゲルを強く意識し、ヘーゲル的な文脈から『根本命題』を読み込むことによるつじつま合わせである。つまり、ヘーゲルの論理では「表象」は克服されるべき段階にあり、概念的に把握されてはじめて「本質」となるはずなのに、フョイエルバッハは師に逆らうかのように「表象＝本質」と同格に置いている。これに訳者が違和感を覚え、その結果、苦肉の策として、3格の *Wesen* を4格にすりかえるか、*dem Wesen, d. h.* を無視するかして逃げたのではないか、という推測である。

しかし、それではあまりにも旧訳者に失礼というなら、もうひとつは、*Wesen* の意味の混乱を避けるべく、読者にわかりやすい訳を提供するために *dem Wesen, d. h.* をわざと消して翻訳したという解釈がある。拙訳を少し要約して説明するなら、「有神論者は神を、A 本質 (= 想念) のほうからは精神的存在者、B 実在 (= 真理) のほうからは感性的存在者と考える」という論旨のあと、「思想の外にある客観的実在の本質的特徴は感性だから」と述べられると、アンダーラインした本質がやや混乱する嫌いがある。この混乱(わかりづらさ)を回避するためにAの *Wesen* を消し、*Vorstellung* だけを残すと、Aは「表象」(拙訳では「想念」)の話、Bは実在物を対象とする「感性」の話と割り切ることができ、邦訳がスッキリと読める。だが、これは邦訳の手法として許容できるものだろうか。わかりやすくなったにしても、原文の美しい対比を見えなくし、断りなく無視するのはよくない。

論文や著書のタイトルなら、そのような省略はありうる。たとえば、ロックの『統治二論』の two を訳さずに『統治論』とするのは、内容からいって適切だ（詳細は世界の名著『ロック』中央公論社の解説を参照）。しかし、松村・和田訳や船山訳の場合は、省略する意図があったなら、その旨、注記するのが訳者の誠実さというものだろう。

フォイエルバッハの息づかいがわからない人には、苛立ちか曖昧さにはしか見えない用語法が、彼特有の風刺的レトリックになっているというのは、筆者の持論である。訳出した箇所はその典型といえるかもしれない。ここでは「A：神のエッセンスは精神なり」と、「B：実在のエッセンスは感性なり」という二つのエッセンス（本質）が摘出され、有神論者が精神的本質としての神を、「神としての神（神自体）」として感性的にあたかも実在するかのように（意識せずに）思い描いてしまう矛盾を解き明かしている箇所である。ありありと神を思い描く有神論者の立場からみた Wesen は「存在者」、これに対し、フォイエルバッハが「実は」という思いをこめて解明的視点で述べている Wesen は「本質」、というのが筆者の解釈である。ドイツ語は Wesen でひとつだから、同じ訳語にすべきという一般的ルールに反した拙訳は、この意味では瑕疵があるかもしれない。しかし筆者としては、フォイエルバッハが杓子定規なヘーゲリアンでなかったように、かたくなに定規をあてるような訳はしたくない。たとえば Wesen をすべて「本質存在」にするといった訳は、一種の「逃げ」だと思う。§ 7 の該当箇所の Wesen をすべて「本質」とするのは無難だが、拙訳にある Wesen のニュアンスは見えづらくなるであろう。

この機会に、柴田氏から古い邦訳の該当箇所の断片をいくつか Word で提供していただき、また、図書館で借りられる資料を数点、対照してみたところ、植村晋六譯『将来の哲学の根本命題』岩波文庫（1930年）と檜山欽四郎譯『将来の哲学の原理』小石川書房（1949年）の訳は、Wesen と Existenz の対を邦訳に反映させていた。先にあげた、松村・和田訳と船山訳のほかでこの対を反映させていない邦訳は、牧野英三譯「将来の哲学の根本命題」、『フォイエルバッハ著作集(4)ヘーゲル哲学の批判』共生閣（1931年）、「将来の哲学の諸原則」中桐大有訳、『フォイエルバッハ選集 哲学論集』法律文化社（1970年）であった。

『将来の哲学の根本命題』を読む読書会のお知らせ

川本隆氏がチューターを務める「フォイエルバッハ読書会」が開催されています。これは、昨年春に開かれた本会研究集会にて、若手研究者や学生、院生がフォイエルバッハ哲学を専攻していなくても気楽に参加できる読書会のようなものがあったら良いね、という話が具体化したもので、その第2回目は、3月31日（木）14：00から、東洋大学白山校舎2号館4階20401B研究室にて。お問い合わせ等は、川本隆氏 t-kawa@toyo.jp まで。

事務局から

- *本紙は季刊発行です。次は6月発行予定です。ぜひ情報やお便りなどをお寄せ下さい。
- *年会費500円。郵便振替00160-1-84468「フォイエルバッハの会」。
- *本紙は、発行から約2週間後に下記ホームページにてpdf版で公開します。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山5丁目28-20
東洋大学社会学部柴田研究室気付
フォイエルバッハの会
tamast@toyo.jp
<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>

7 頁～ 8 頁 服部健二『四人のカールとフォイエルバッハ』に対する書評 2 点（『図書新聞』ならびに『読書人』掲載）を転写